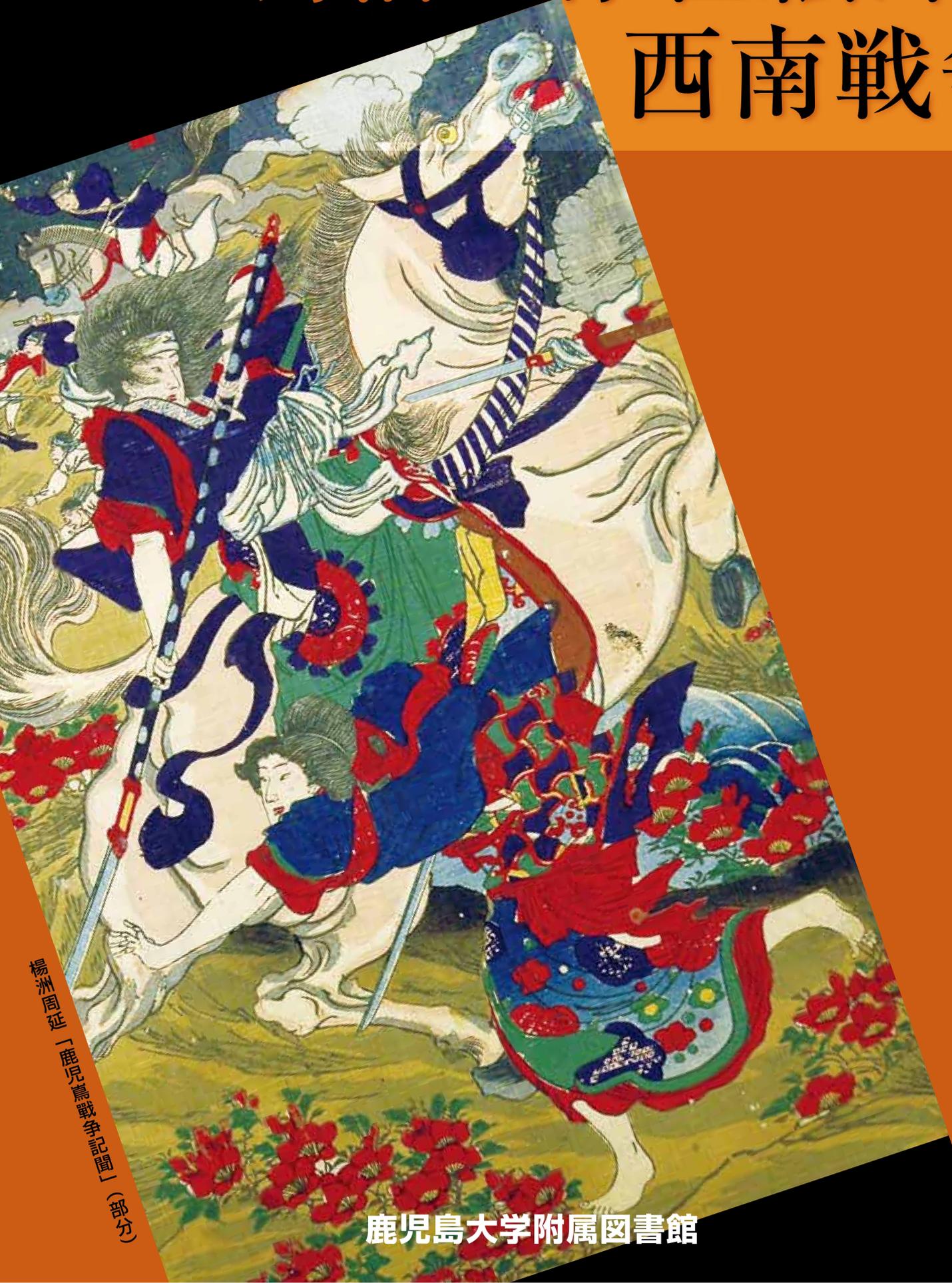


平成23年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

明治の浮世絵師と 西南戦争



楊洲周延「鹿児島戦争記聞」(部分)

鹿児島大学附属図書館

巻頭言

平成 23 年度の貴重書展は、鹿児島大学附属図書館が収蔵する明治期の錦絵の中から、西南戦争に関わるものを中心に企画展示を行うものです。

江戸初期に始まった浮世絵は、江戸中期に多色刷り版画の技法を確立しますが、錦絵はその代表といえます。錦絵に取り上げられた題材は、人々の日常の生活や風物など多岐にわたりますが、錦絵は事実を客観的に描写したと言うよりは、制作者や受け手である庶民の思いや願望を強く反映したものになっており、それ故、錦絵を解説することで、制作された当時の風俗や社会、人々の意識などを知ることのできる興味深い資料であると言えます。

この度の企画展では、明治政府にとっては所謂賊軍である西郷軍が、錦絵によってどのように描かれたのかを、多角的な視点から考察しています。オーソドックスな歴史書では取り上げられることの少ない錦絵という資料から、歴史的な大事件である西南戦争を垣間見ることで、当時の世相が読み取れ、極めて興味深いものとなっています。

また、錦絵に対する美術的な評価は様々であり、今回取り上げた西南戦争を題材にした錦絵も美術的な評価は決して高いものとは言えませんが、使用された絵の具や描画技法についても、前後の時代のものと比較することで、近代化のなかで西洋における技法を取り入れながら、伝統的技法を変容させていく過程を考察することで、日本と西洋という異質な文化の出会いが、どのように融合されていくのかを知ることのできる、興味深い資料となっています。

この度の企画展をきっかけに、多くの方が西南戦争という日本の近代化の過程で生じた大事件について、もう一度目を向けることで、日本の近代化が抱えていた問題と痛みについて新たな発見と理解をして頂ければ幸いです。また、歴史資料や美術資料が映し出す多様な側面についてご理解頂けるものと期待しています。

鹿児島大学附属図書館
館長 井上佳朗

目次

| | | | |
|--------------------------|-----|------------------|-----|
| 錦 絵でたどる西南戦争 | p4 | 芝 居絵の名手：歌川国貞（三代） | p14 |
| 奇 行の浮世絵師：豊原国周 | p6 | 「鹿児島軍記之内」 | p14 |
| 「西條團洲先生の小傳」（かなよみ新聞第六百六号） | p6 | 早熟の浮世絵師：山崎年信 | p14 |
| 「見立三勇士」 | p7 | 「近世報國高名集」 | p14 |
| 美 人画の名手：楊洲周延 | p8 | 星 になった西郷さん | p15 |
| 「鹿児島勇婦揃」 | p8 | 早川松山「西郷星地落人民之口」 | p15 |
| 「鹿児島戦争記聞」 | p9 | | |
| 残 酷絵の巨匠：大蘇芳年 | p10 | | |
| 「鹿児島紀聞之内 副将村田討死之図」 | p10 | c o l u m n | |
| 「芳年武者无類 八幡太郎義家」 | p10 | 「錦絵新聞」 | p7 |
| 「鹿児島明暗録」 | p11 | 「東京曙新聞と女隊」 | p9 |
| 光 と影の浮世絵師：小林清親 | p12 | 「歌川派の時代」 | p11 |
| 「新聞鹿児島事情」 | p12 | 「文明開化の色彩」 | p13 |
| 「九段坂五月夜」 | p13 | | |

明治の浮世絵師と西南戦争

平成23年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

明治10年(1877)2月に始まった西南戦争は、9月24日の西郷隆盛自決を以て収束する。西南戦争は、徳川幕府が倒れた明治維新後10年目に起こった日本の歴史上最後の内戦であり、薩摩出身の肉親、知友が敵味方に分かれ激しい戦闘を8ヶ月に渡ってくり広げるといふ悲惨な側面を有した。熊本から宮崎、鹿児島を中心として行われた戦闘の様子は、明治維新後の新しい情報伝達システムである新聞によって、東京、大阪などに伝達されたが、同時に江戸時代以来の伝統的な多色刷り版画「錦絵」も新聞挿絵として、また、単行の錦絵として、西南戦争報道の一翼を担うことになる。明治10年2月から11年8月にかけて主として出版された「西南戦争錦絵」は、1枚ものから3枚揃いまで、約600種にも達するもので、絵師も50人を越え、版元も80人を越える。発行総数は数十万枚にも達したとする推定もある。「西南戦争錦絵」が、西南戦争イメージの定着に対して大きな力を持ったことは事実であるが、それは、西南戦争の実態をリアルに伝えるものではなかった。文字でもたらされる情報を即座に絵画化せよと要求された浮世絵師は、服装は明治であっても、登場人物の所作は江戸歌舞伎の型に習い、見たこともない人物の顔かたちは類型化した役者絵、美人画のそれを踏襲するものとなった。さらには、戦争の叙述も、英雄、貞女が活躍し、善悪の対立の明白な軍記物の世界へと引きつけられていく。知識人を対象とする新聞報道が事実を叙述しても、もっと広い階層にアピールするための絵画化の段階で、江戸時代以来の物語の世界が混入してくるのである。多くは明治政府のお膝元東京での出版であるが、判官びいきも甚だしく、「賊軍」と呼びはするが活躍する英傑は薩摩軍がほとんどで、とりわけ西郷隆盛人気は著しいものがあつた。鹿児島大学附属図書館は、数こそ多くはないが、28点の西南戦争錦絵を所蔵しており、今回の展示は、その中から明治の浮世絵師と西南戦争の接点を示す作品が選ばれている。

図録作成に当たっては、多くの先行研究のお世話になったが、特に国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』(東京堂出版、2008年)、土屋礼子『大阪の錦絵新聞』(三元社、1995年)、村野守治「西南戦争錦絵目録」(『敬天愛人』2号、1984年)、小川原正道『西南戦争』(中央公論新社、2007年)に多くを負っており、感謝を捧げたい。(高津)

錦絵でたどる西南戦争

明治6年政変

明治6年(1873)10月24日、西郷隆盛は征韓論に敗れ、辞表を提出する。鹿児島への帰郷に際しては、桐野利秋(陸軍少将)、篠原国幹(陸軍少将)ら西郷派の将官も辞職して同行、総数数百名に上ったという。

征韓論

当時、鎖国攘夷を方針としていた朝鮮と日本との間に深刻な対立が生じたことに対して、板垣退助の即時派兵論、西郷隆盛の使節派遣を優先すべきとの論が興ったが、こうした見解の背後には、明治維新を経て特権を失った士族たちの反政府的風潮の高まりを背景としていた。しかし、即時派兵はもとより、使節派遣も戦争になる可能性が高く、現在の日本は財政的にも外交的にも戦争を行える状況にないと判断した大久保利通、木戸孝允、岩倉具視の反対により、この論争は西郷らの敗北に終わった。



私学校の設立

鹿児島に戻った西郷派の士族は、明治7年(1874)6月、旧鶴丸城跡に私学校(銃隊学校、砲隊学校)を創設、鹿児島県令大山綱良の支持を受けて、鹿児島県は私学校党による独立国のような趣を持つようになる。

火薬庫襲撃事件

明治10年(1877)1月29日から2月2日にかけて、私学校党側は、草牟田の陸軍火薬庫、磯の海軍造船所を襲撃、弾薬、小銃を略奪する。

政府から派遣され、鹿児島の動静を探っていた中原尚雄(伊集院出身)が私学校党に捕まり、拷問の結果、西郷暗殺計画を自供する供述書が取られ、これが私学校党を刺激し、挙兵の名分となった。しかし、この供述書には捏造もあり、真偽は不明である。



西郷出陣

2月17日 西郷は鹿児島を発ち、熊本を目指す。兵員総数は約16000名とされる。2月19日 鹿児島県暴徒征討令下る。征討総督有栖川宮熾仁親王、参軍山縣有朋中将、川村純義中将。

熊本城籠城戦

熊本城に置かれた熊本鎮台は、兵員3千数百名で、薩軍兵力の4分の1以下であったため、援軍を待っての籠城戦となった。2月21日に薩軍が城下に侵入し戦闘が開始された。薩軍は22日に総攻撃を仕掛けるも落ちず。熊本城に対しては約3000名で包囲戦をとり、南下する政府軍に対しては、山鹿方面、田原坂方面、木留方面の三方面から迎え撃つこととした。最終的に、政府軍別働第一旅団が熊本城に入ったのは、4月15日であった。

連 隊旗喪失

乃木希典率いる政府軍第十四連隊は、2月22日、尙坂の戦いで、薩軍に敗れ、連隊旗を奪われる。2月23日、政府軍は木葉の戦いでも薩軍に破れ撤退するが、2月25日、高瀬の戦いでは、薩軍を退ける。

田 原坂の戦い

南下する政府軍を迎えて最も激しい戦闘が行われたのが田原坂である。田原坂は、勾配の急な坂道の両側が急峻な崖となっており、守るに易く攻めるに難い地形である。薩軍はここに防備を固めた。政府軍の総攻撃は3月4日に始まり激しい銃撃戦、白兵戦が行われた。薩軍の白兵突撃に対して政府軍によって組織された抜刀隊の主力は鹿児島島の郷士出身の巡查であり、薩摩出身者が敵味方に分かれて戦うことになった。20日の政府軍による総攻撃の後、堡塁に残された薩軍の遺体は130余に上ったという。



人 吉攻防戦

熊本退却後、人吉に薩軍は集結し、防備を固める。政府軍は5月6日より攻撃を開始し、6月1日市街に突入し勝利する。2年保つ予定の人吉は1ヶ月で陥落した。

政 府軍の鹿児島上陸

熊本城開通後すぐ、4月27日には政府軍は鹿児島に上陸する。これに対して、薩軍鹿児島分遣隊が5月5日より攻撃を仕掛けるが、6月22日重富に上陸した政府援軍によって、薩軍は鹿児島から撤退する。

薩 軍の鹿児島奪還

7月24日に都城が陥落し、31日に宮崎が落ち、8月14日に延岡が陥落したのち、17日に薩軍は西郷隆盛を擁して政府軍の重囲を突破、9月1日に鹿児島を奪還、城山に本営を置く。

9月24日に政府軍は城山を総攻撃し、西郷隆盛は別府晋介の介錯により自決する。(高津)



西南戦争錦絵 (個人蔵)

年次：明治11年11月16、21日届出 絵師：國政(竹内栄久)

版元：辻岡文助 判型：四ツ切判

奇行の浮世絵師：豊原国周



かなよみ新聞第六百六号 (本館所蔵)

年次：明治11年3月某日届出 絵師：豊原国周 版元：福田熊次良 判型：大判二枚続

絵師の豊原国周 (1835-1900) は、歌川国貞 (三代歌川豊国) の門人で、本姓は荒川、俗称は八十八。最初、豊原周信に弟子入りしたので、豊原を名乗った。大蘇芳年、小林清親と並び称される最後の浮世絵師である。役者絵によって名を知られ、後世、「明治の写楽」と称された。変人として有名で、本人の談によると、生涯に117回転居し、妻は40余人いたという。宵越しの金は持たない侠気に満ちた人柄で、画料は酒と遊びに消え、借金だらけであったという。弟子に美人画を得意とした楊洲周延がいる。

『仮名読新聞』は、当時、戯作者として有名であった仮名垣魯文 (1829-94) の編集によって、横浜毎日新聞会社より刊行された小新聞である。錦絵版は、7点が確認されている。西南戦争終結の翌年 (明治11年) 2月に、東京の新富座で河竹黙阿弥 (1816-93) 作『西南雲晴朝東風』 (おきげのくもはらふあさごち、7幕19場) が、西郷隆盛を九代目市川團十郎が演じて上演される。興行は大成功で80日余打ち続けたという。内容は、征韓論に破れて下野した西郷隆盛が、三太郎峠に陣を敷き、熊本鎮台を攻めるが、陥落させられない。鹿児島勢が劣勢となる中、西郷が山縣有朋の勸降状を見て、決戦の後に死ぬことを覚悟するところを描いている。しかし、「賊徒」の人氣ぶりは政府の不興を買い、明治11年5月には、内務省から西南戦争を錦絵や絵双紙にするのを禁ずる通達が出されている。上掲の錦絵新聞は、この芝居の興行に併せて刊行されたものである。仮名垣魯文「西條團洲先生の小傳」は、西郷隆盛 (南洲) に扮した市川團十郎の伝記で、ひねりを加えてある。九代目市川團十郎 (1838-1903) は、明治歌舞伎の黄金時代を代表する歌舞伎役者。歌舞伎の近代化に努め、伝統的な江戸歌舞伎の荒事の所作を整理し、今に伝わる型を決定した。(高津)

錦絵新聞は、江戸時代に行われた多色刷り版画「錦絵」と、明治時代になって欧米から導入された「新聞」が結びついたもので、明治5年(1872)に創刊された日刊紙『東京日日新聞』の記事に基づいて作られた錦絵シリーズに始まる。明治7年(1874)に錦絵版『東京日日新聞』という専門紙が刊行されると、約40種の錦絵新聞が、東京、大阪、京都などの大都市で発刊された。

事実を報道するというこれまでなかった新しいメディアとしての新聞は、明治3年創刊の『横浜毎日新聞』、明治5年創刊の『東京日日新聞』『朝野新聞』『郵便報知新聞』がそれぞれあったが、漢文に親しんだ知識人向けの新聞であり、読者は限られていた。明治7年11月に総振り仮名の『読売新聞』が発刊されると、たちまち評判を呼び、部数は一挙に一万部を越え、同様の新聞が多数刊行された。これらの新聞を小新聞こしんぶんという。非知識人を対象とする大衆紙にあたるものである。さらに、ニュースを絵にして見せるという錦絵新聞は、非知識人層を対象とした新たなメディアとなったのである。明治を代表する浮世絵画家の大蘇芳年たいそよしとしは、『郵便報知新聞』に60点以上の錦絵を提供している。『仮名読新聞』には、豊原国周とよはらくにしうの他、大蘇芳年、歌川孟斎かうまうさい、歌川国貞かうくにさだ(三代)が錦絵を提供している。(高津)



見立三勇士 (東京都立中央図書館特別文庫所蔵)

年次：明治10年5月17日御届 絵師：豊原国周 版元：荒井喜三郎 判型：大判三枚続

豊原国周は、明治2年に役者似顔大首絵にが おおおくびえシリーズを刊行し、役者の持ち味を顔の表情だけで描ききった傑作と評判を取り、「役者絵の国周」と呼ばれるようになる。「見立三勇士」は、九代目市川團十郎みたちの西郷隆盛、五代目尾上菊五郎おのえきくごろうの桐野利秋きりのとしあき、初代市川左団治さだんぢの篠原国幹しのはらくにもとの半身絵である。三人は、「團菊左」と呼ばれ、明治歌舞伎の黄金時代を築いた名優である。実は、国周は、市川團十郎とは肌合いが合わず、尾上菊五郎をひいきにしていたという。(高津)

美人画の名手：楊洲周延



鹿児島勇婦揃 (本館所蔵)

年次：明治10年8月23日御届 絵師：楊洲齋周延(楊洲周延) 版元：井上茂兵衛 判型：大判三枚続

楊洲周延(1838-1912)は、越後の人で、本名橋本直義、楊洲を号とした。豊原国周の門人で、明治時代の風俗画、美人画で一世を風靡した。17才で三代豊国に入門、一時、国芳の門人一声斎芳鶴に師事、その後、国周に師事した。幕府の御家人であったこともある周延は、明治維新に遭遇して絵師の生活を棄て、彰義隊に加わり慶應4年(1868)5月15日の上野の戦いに参加、負傷して捕らえられるも、8月に幕府の回天丸に乗って品川湾から脱走、10月に函館に上陸、明治2年(1869)宮古湾海戦に際して泳いで脱出するが、官軍に降伏、高田藩に幽閉の後、明治4年頃、東京に戻った。東京では再び絵師としての生活にもどり、西南戦争に際しては、大蘇芳年と並んで大量の錦絵を製作している。後年、御家人時代の知識を生かして、江戸城大奥の様子を描いた「千代田の大奥」(40枚、明治29年)や美人画のシリーズ「時代かがみ」(大揃53枚、明治29年)「真美人」(大揃36枚、明治30年)で風俗、美人画家の名声が確立する。

「鹿児島勇婦揃」は、薩摩軍の主要人物の妻子を描いたものである。様式的な美人画で、現実の人物をリアルに画いたものではない。東京の庶民の要求を反映して、人気のある薩摩方の人物の妻子12人が選ばれたのであろう。『西南記伝』によれば、薩摩軍は、2000名で構成される大隊7つに編成され、それぞれ、一番大隊長：篠原国幹、二番大隊長：村田新八、三番大隊長：永山弥一郎、四番大隊長：桐野利秋、五番大隊長：池上四郎、六番・七番連合大隊長：別府晋介となっており、辺見十郎太は、三番大隊一番小隊長、淵辺高照は、薩摩本営附護衛隊長、河野四郎左衛門は、城山決戦の時の上の平・広谷・三間松方面小隊長であった。西郷自決の直後、10月22日に出版された大西庄之助『鹿児島美勇伝』3冊は、西南戦争に関わった英雄、貞女を取り上げたものであるが、貞女としては、「桐野の娘花子」「児玉妻玉江」「篠原国子」「桐野の妾松女」「伊集院の伯母」の5名が取り上げられている。(高津)

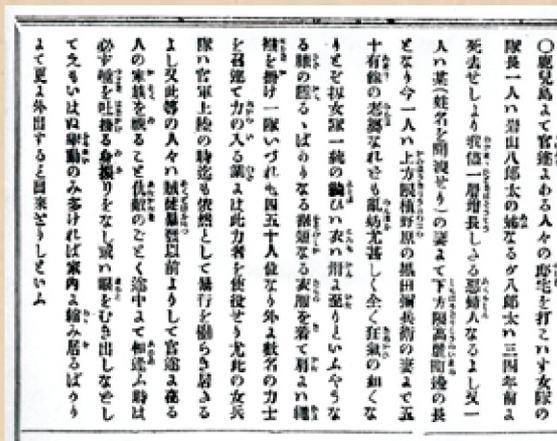


鹿児島戦争記聞 (本館所蔵)

年次：明治10年6月11日御届 絵師：楊洲齋周延(楊洲周延) 版元：木曾直次郎 判型：大判三枚続

大西庄之助『鹿児島美勇伝』「桐野の娘花子」の条には、「西郷隆盛の一子菊次郎国隆の結名付にして、容顔美麗、傾国の粧ひあり。且心猛く武術に長ず。今年十七才の春、親夫とも戦場へ赴きし跡、伊集院の伯母と同意して鹿児島に在る官員の宅を破毀し、猶戦場へいたり、女隊に加はり、屢々官軍に抗したり」という。「鹿児島戦争記聞」は、山ツツジを背景に、薩軍の女隊の活躍を描いたもの。(高津)

右は、明治10年5月30日の東京曙新聞の^{あけぼの}記事である。翌日の関連記事も合わせると、鹿児島で公職についた人々の邸宅を打ち壊す女隊というもの^{あけぼの}が三隊存在したこと、一隊は4、50名ほどで、数名の相撲取りを引き連れ、力業は彼らに任せたこと、隊長として、黒田彌兵衛の妻や伊集院兼徳の伯母等の悪婦人がいたことを言う。銃撃戦と白兵戦を中心とした実際の戦闘では、ほとんど活躍の場はなかったと推測されるが、わずかこれだけの記事から、薩軍の主要人物の妻子が戦いの場で華々しく奮戦する錦絵が数多く作成されたのである。楊洲周延は、このテーマで13枚もの錦絵を残している。(高津)



東京曙新聞・明治10年5月30日
(柏書房復刻版による)

残酷絵の巨匠：大蘇芳年



鹿兒島紀聞之内 副将村田討死之図 (国立国会図書館所蔵)

年次：明治10年3月20日御届 絵師：大蘇芳年 版元：小林鉄次郎 判型：大判三枚続

大蘇芳年（1839-92）、旧姓は吉岡、後に月岡、本名は米次郎。嘉永3年（1850）に歌川国芳（くによし）に入門、芳年と名乗る。号は、始め一魁斎、玉桜楼、明治6年より大蘇となる。芳年の錦絵は、幕末の不穏な世相を背景として、慶応年間から明治初年にかけて製作された一連の「血みどろ絵」（無惨絵、残酷絵）が有名であるが、「副将村田討死之図」も血まみれの表現が彼の独自性を物語る。華麗な色遣いと、動作の瞬間のストップモーション的把握は評価が高い。他の浮世絵師が登場人物の所作に歌舞伎の型を利用するのは対照的である。

村田新八（むらたしんぱち）（1836-77）は、年少の頃より西郷隆盛に兄事し、幕末、戊辰戦争の時期も常に西郷の側で軍務についた。明治政府では、明治4年に宮内大丞に任ぜられ、すぐに条約改正の為の岩倉遣欧使節団に参加、明治7年帰国後、直ちに鹿兒島の西郷の元に赴いた。西南戦争では、薩軍の二番大隊長として戦った。上掲錦絵では、2月25日に始まる高瀬（たかせ）の戦いで村田が討ち死にしたとするが、実際に村田が没したのは、9月24日の城山（しろやま）総攻撃の時である。（高津）



芳年武者无類 八幡太郎義家 (国立国会図書館所蔵)

年次：明治19年1月某日御届 絵師：大蘇芳年
版元：小林鉄次郎 判型：大判

かごしまめいあんろく
鹿兒島明暗録 (本館所蔵)

年次：明治11年4月12日御届 絵師：大蘇芳年
版元：小林鉄次郎 判型：大判

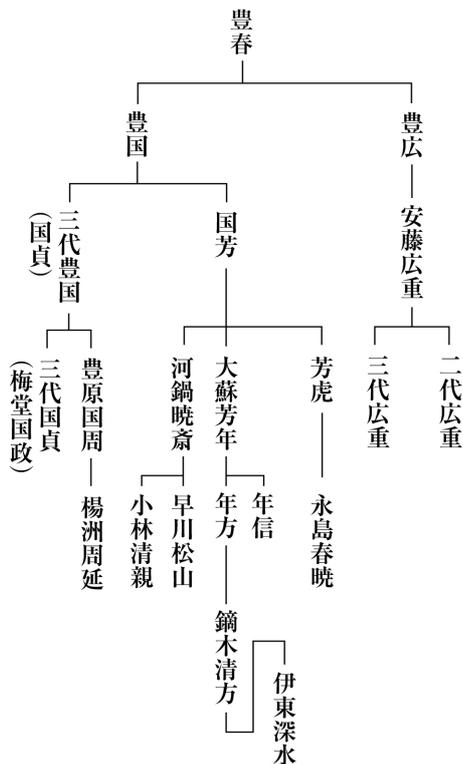
鹿兒島明暗録は、西南戦争で明暗を分けた薩軍方、政府軍方の主要人物を選び、人物像の錦絵に解説を付したシリーズもので、大山綱良、西郷隆盛、永山矢一、篠原国幹、篠原国子、山県有朋、前原一格、桐野利秋、池上四郎、貴島清、鳥尾小弥太、巡查某が知られている。

「篠原国子。篠原国幹の娘にて、婦女ながらも武を嗜み文を講ずるのみならず、孝心深き生質なれば、父国幹が討死と聞き、憤怒の心を励まし、直ちに西郷が陣所に至り、父に換りて出陣を許し給へと乞ければ、隆盛殆ど困じたれど、遂に止むる事を得ず、花岡山の戦争に賊徒に守護せ出陣さするに、進退早技飛蝶の如く、屢敵を悩ませしも、本年僅十六歳の、花の苔みは花岡山の花を欺く容貌に露を含める風情なりと、敵も味方も賞せしとぞ。芝浦鉤史填詞」。(高津)



Column

歌川派の系譜



江戸後期から明治にかけて、浮世絵の世界では歌川豊春に始まる歌川派が圧倒的な勢力を誇るようになる。豊春は、室内や建築物を対象とし、図法上、不合理な点の多かった浮世絵を改良し、戸外の自然景を対象とし、合理的図法の風景画や肉筆美人画で人気を博した。豊春の弟子の豊国は、美人画の他、草双紙挿絵や役者絵を手がけ、絶大な人気を獲得した。同じく豊春の弟子の豊広も錦絵制作の他、黄表紙、合巻、読本の挿絵で活躍した。豊広の弟子には、『東海道五十三次』錦絵で有名な安藤広重が出ている。歌川派が隆盛を極めることになったのもこの二人の活躍に負う所が多い。特に豊国は数多くの門人を養成し、一大勢力を築くことになる。西南戦争錦絵で活躍したのは、豊国の孫弟子、ひ孫弟子の世代である。西南戦争錦絵中、作画数の多さで群を抜く大蘇芳年(90点以上)、楊洲周延(120点以上)は、前者が豊国の孫弟子で、後者が豊国のひ孫弟子である。(高津)

歌川派の時代

光と影の浮世絵師：小林清親



新聞鹿兒島事情 (本館所蔵)

年次：明治10年2月19日御届 絵師：方円瀨親(小林清親) 版元：武川清吉 判型：大判三枚続

小林清親(1847-1915)は、本名も同じで、画号としては方円舎、真生楼、真正がある。父は幕府の下級御家人であった。父の死後、家督を相続、慶應元年(1865)御勘定下役として、徳川家茂に従って入浴、鳥羽伏見の戦いに参戦している。江戸開城後、徳川慶喜に従い静岡に移住、明治7年(1874)に東京に戻り絵師となった。写真術を下岡蓮杖に学び、ワグマンから油彩画を学び、浮世絵師の河鍋暁斎に絵手本を描いて貰い、柴田是真に漆絵を学んだという。したがって、ほとんど独学で画法を身につけたといえる。明治9年から14年にかけて版行された「東京名所図」シリーズは、東京の市井の人々の生活風景を光と影の中に情感豊かに描き出し、光線画(西洋の遠近法や陰影法を取り入れた東京名所図)と呼ばれる。季節や気候、時間の経過に依って生ずる風景の変化を表現しており、同じく維新後の新しい風景を写した開化絵とは趣を異にする。明治14年以降は、社会風刺、政治批判的な風刺画も制作するようになった。明治18年には、広重の「名所江戸百景」を意識した「武蔵百景」シリーズも描いている。しかし、清親のこうした活発な創作活動にも関わらず、日清戦争の終結とともに錦絵人気は凋落し、浮世絵の時代は終焉を迎えたのである。

「新聞鹿兒島事情」は、西南戦争の引き金となった火薬庫襲撃事件を描いたものである。鹿兒島での不穏な情勢がつのる中、明治10年1月政府は、三菱会社の汽船赤龍丸を派遣して鹿兒島に貯蔵された弾薬、銃器の回収を決定した。これに刺激された私学校党の一群千名が、1月29日夜から、草牟田の陸軍火薬庫、磯の海軍造船所火薬庫を襲撃し、弾薬を奪い、建物を破壊した。これが私学校党決起の切っ掛けとなった事件である。小林清親得意の夜陰の情景で、場所は海の向こうに桜島を臨む磯の海軍造船所である。海軍側、私学校党側が、歌舞伎の立ち回りの様な仕草で対面し、緊迫した状況を表現している。(高津)



東京名所 (九段坂五月夜) (東京都立中央図書館特別文庫所蔵)

年次：明治13年某月某日御届 絵師：小林清親 版元：福田熊治良 判型：大判横

維新後の新しい社会、風俗を錦絵にした開化絵は、アニリン染料の赤を盛んに濃厚に使用したため、赤が他の色を押しのけて目立つ作品となった。そのため、赤絵と呼ばれる。一方、清親の光線画は、光と影、光線の微妙な変化を捉え、それを穏やかで柔らかな色彩で表現した。水平線を画面中央から下に置き、広い空を自然な色合いで描き、感傷的な情趣を生み出している。木版による西洋画と称されるものである。(高津)

明治時代の浮世絵は現代ではあまり人気がない。浮世絵といえば、穏やかで繊細な色調のものが多く、江戸も末期に近づくにしたがい、次第に色調は鮮明になり、明治に入ると毒々しいまでの赤や紫、青の色彩が目立ってくる。江戸時代の浮世絵の顔料は、紅(紅花)や藍(藍、露草)といった植物顔料と、朱(酸化水銀)、べんがら(酸化第二鉄)といった鉱物顔料が用いられた。ところが、植物染料の藍は高価で、一方、露草による藍は色あせが早く安定していなかった。そのため、文政12年(1829)化学染料“ペロ藍”の舶来より、安価で発色の良いペロ藍が多用されることになる。北斎の作品にはこのペロ藍が特徴的である。さらに、幕末から明治にかけて、アニリン(赤)やローダミン(桃色)、ムラコ(紫)などの化学染料が盛んに用いられるようになった。明治の人々にとって、これらの鮮やかな色彩は文明開化の色であったのである。(高津)

芝居絵の名手：歌川国貞（三代）



鹿兒島軍記之内（本館所蔵）

年次：明治10年10月22日御届 絵師：梅堂國政（歌川国貞（三代）） 版元：大西庄の助 判型：大判三枚続

歌川国貞（三代）（1848-1920）は、本名は、竹内栄久。画号は梅堂。初代国貞（二代豊国）、二代国貞（三代豊国）に師事。四代国政を称して役者絵を得意とした。明治22年に三代国貞を襲名する。図は二重峠（阿蘇市）の戦いを描いたもの。図中、逸見十郎太はまさかりを手にしており、まるで坂田金時である。（高津）

早熟の浮世絵師：山崎年信



近世報國高名集（本館所蔵）

年次：明治10年5月30日御届 絵師：山崎年信 版元：辻岡文助 判型：大判三枚続

山崎年信（1857-85）は、明治3年（1870）わずか13歳で大蘇芳年に才能を見いだされ入門する。明治10年、20歳そこそこの年齢で錦絵の制作を依頼されることは極めて異例であり、優れた才能を有する早熟の浮世絵師であった。その後、大阪に移り『魁新聞』の挿絵画家となるが、酒色に溺れ、師匠芳年の画稿を持ち逃げする不祥事まで起こし、京都で没した。（高津）

星になった西郷さん



西郷星地落人民之口 (本館所蔵)

年次：明治10年10月3日御届 絵師：松月保誠(早川松山) 版元：門戸松蔵 判型：大判三枚続

薩軍の敗色が濃厚となっていた明治10年の8月頃から、夜空に一際目立つ赤い星が輝くようになった(実際は火星の接近によるものであった)。これを望遠鏡で眺めると軍服姿の西郷隆盛が見えるという噂が広まり、錦絵や絵入新聞で種々報道された。人々はこれを「西郷星」と呼んだ。また、9月24日の西郷没後、西郷の首が発見されなかったこととも相まって、西郷が星になった、西郷が大陸に逃れた等の風説が流布した。

上掲の錦絵は、西郷没後まもなく作成されたもの。絵師の早川松山(1850 - 1889)は、河鍋暁斎の門人。名は徳之助。号は松山、晴誠、帰誠など。明治10年に松山から松月保誠に改号した(右下に落款がある)。

表題のとおり、西郷星が落ちた後(薩軍が破れた後)、当代のさまざまな職業、階層の人々、および歴史上の人物がそれぞれの立場から、この戦や西郷に対して思い(愚痴や怨み)を口にするという内容である。

中央には西郷の大首(落ちた西郷星)が軽気球の籠の上に乗っている。軽気球は当時新政府が軍事目的で実験を行っていたものである。つまり、この絵は西郷星の落下を軽気球の落下に擬えて描いているのである。人々はこれに群がり手々に気球の綱をもち右と左に引きあう。向かって右にいる人々は、この戦によって利益を得た者たち——相場師や巡査を客とする花魁(遊女)、読売(新聞)の配達人など——で戦争の終結を残念がり、左の人々は直接、間接に被害を被った者たち——この戦争で息子を失った母親、田畑が戦場となった農民、仕事なくなった大工や車夫など——で口々に恨み言を吐いている。また、右上では星を表す丸の中に楠正成、和氣清麻呂を描き、二人は忠義無二の西郷が天朝に反逆したことを嘆き、左上では、平将門、藤原純友が西郷を謀反人に引きずり込んだことを喜んでいる。中央には加藤清正を描き、熊本城が陥落しなかったことを自慢している。人々の利己主義的な発言の数々は当時の世相の反映であり、張りぼてのような西郷の大首と薩軍の掲げたスローガン「新政厚徳」が破裂した気球のように虚しいことを伝えている。近世と近代の交替期の混沌とした世相を鋭く風刺した河鍋暁斎の影響を認めることができよう。(丹羽)

豊原国周

楊洲周延

大蘇芳年

小林清親

早川松山

山崎年信

歌川国貞(三代)

明治の浮世絵師と西南戦争

平成二十三年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開
会期 平成二十三年十一月十九日～十二月四日
会場 鹿児島大学附属図書館

編者

高津孝

発行者

丹羽謙治

鹿児島大学附属図書館

(担当：学術コンテンツ係)

発行日

鹿児島市郡元一―二一―三五
平成二十三年十一月十九日